エッセイ

1　四日市的シネマ体験　その2

藤田　明

高校3年の夏に倒れ、しばらく映画館とは縁切れの時期に入った。その間は世間から遠ざかり、白砂青松の海岸にあって読書や音楽へと沈潜していく。やがて『第三の男』には惚れ込めず、『令嬢ジュリー』に魅せられ、『天井桟敷の人々』よりは『河』だなどと心ときめく日々に半ば戻ったのは１９５２年のこと。『禁じられた遊び』よりも『文化果つるところ』や『罪ある女』、その辺りは５３年。親しさをおぼえていた相手（と言っても会える機は年に数回ほど）が別の男性に誘われて『狂熱の孤独』へ、そう耳にして複雑な気になった５４年の場合、私の洋画トップは『偽りの花園』。

邦画で５５年の『浮雲』は小津をうならせたわけだが、５６年の私の一位は『早春』。「映画藝術」がそれに関する一文を載せてくれたが、同じころ「映画評論」の読者論壇は『早春』否定論を採り、しかも同誌に寄せられた「早春」論はすべて否定的だとするコメントも付いていた。昨秋に佐藤忠男さんが來津の折、たずねてみると選をしたのは滝沢一。関西へ投稿分をまわして選んでもらい、選評も氏。自分は編集部へ入ったばかり、自転車で走り使いの頃とのことだった。

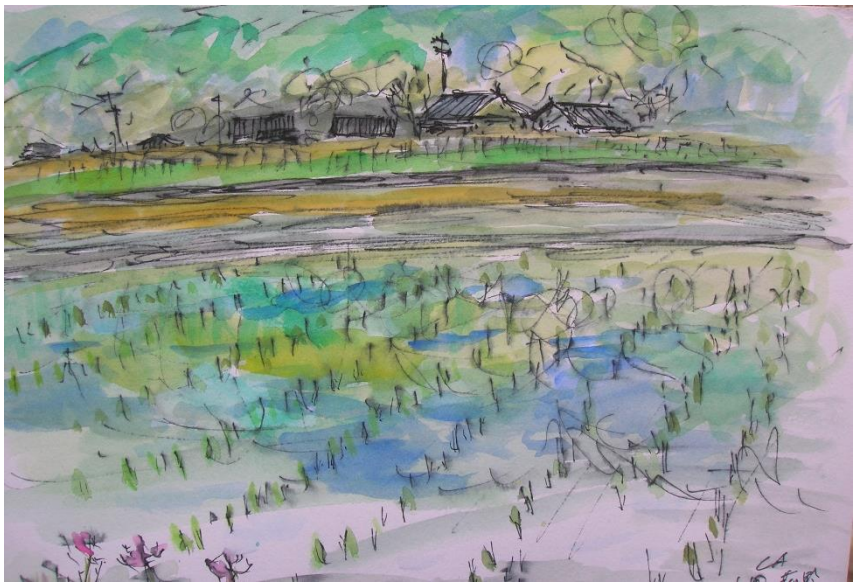
小津評価に孤立感を抱いた青春期の一例だが、「旬報」ベストテンでも『早春』一位は杉山平一・吉田智恵男の二人だけだった。吉田さんとは上京時に二度ほど、話はできたものの、早く亡くなる。杉山さんと親しくなれたのはもっと後だった。

それら邦・洋画とも見た多くは津であって四日市ではない。7年ぶりに四日市の館で接したのはエリア・カザンの新作。５７年、小津で言うなら『東京暮色』の年である。復学後の高校、また大学時代を通じ、もたもたして人さまより3年遅れでいたが、それは学生時代最後の夏の初めだったろうか。私の『早春』の一文は短かったが、やはり「映画藝術」へ長文の『道』論などを送り、選ばれた女性が奈良にいた。後輩の女子学生とたまたま映画談議をしていたら、あれは姉。近く一時帰省するので会いますか、ということになった。三人は近鉄諏訪駅で落ち合い、こともあろうに当時としてはかなり挑発的な『ベビイドール』の三重劇へ、まず向かったのである。

【付】追懐・澤井余志郎さん

澤井さんが亡くなった。いくつもの場面が甦ってくる。最初は劇団三期会による『長い夜の記録』を四日市労演で見た辺りと関係がある。尾鷲から四日市へ私は転勤となった年で、公演の前後に労演の広瀬さんや労音の久富さん、それに地区

労事務局の澤井さんと歓談できたひと時があり、そこで静岡県雄踏町出身と知ったのだったか。その町には父の姉が住んでいて、歩いて数分の所に澤井商店はあった。澤井さんのことばのトーンは父とそっくり。静かだが芯は強い。父に付いて戦中・戦後と何度も浜名湖畔の父の故郷や雄踏を訪れていたので、何よりも遠州の人というのが澤井さんの第一印象だった。

公害問題が顕在化する以前であり、弟、信一郎監督の『Wの悲劇』より２２年も前のことになる。

（つづく）